

試験の内容及びその結果

専攻・分野	日本語学・日本語教育学分野	氏 名	鈴木 崇夫
試験担当者	主査 田中 真理 副査 廣瀬 正宜 副査 石田勢津子 副査 中島 和子		

1. 口述試験の内容

口述試験は、平成 25 年 9 月 17 日 13 時 30 分から 3 時間にわたって行われた。初めに、論文申請者によって 30 分間研究の概要についてパワーポイントを使って詳細な説明がなされた。その後、内容や方法論に関して質疑応答が 4 名の試験担当者と申請者の間で行われた。最後に、全体を総括した質疑応答、今後の展望に関して意見が交わされ、16 時 30 分に終了した。

口述試験における試験担当者からのコメントは、総じて論文内容を高く評価するものであったが、方法（統計手法）や統計結果の解釈について等、質問が出された。また、今後の研究の方向性に関してもアドバイスがなされた。質疑応答や試験の内容の主な点は以下である。

(1) なぜカナダのアルバート州の継承語教育のプログラムを取り上げたかという質問に対して、申請者はこれまでの継承語教育事情を踏まえて、その理由を明確に答え、バイリンガルやバイリンガル教育に関する専門的知識を十分有していることを示した。

(2) 意識調査、作文力テスト、学力検査等の関連性を見るために、検定や相関や因子分析等の統計処理を行っているが、処理すべき変数の取り方を工夫した方がよい箇所が見受けられるとの指摘があった。それに関し質疑応答がなされたが、その受け答えから、申請者の統計的手法の理解や知識のレベルの高いことが確認された。

(3) パーシャル・イマージョンに関して、中国語を授業言語として半日も使用していながら、伸びなかったのはなぜかという質問に対し、申請者は現地語（英語）と継承語（中国語）を使う授業の連携がないからであろう、Cummins（2009）の二言語間の転移を促進する教育アプローチが必要だと述べた。この点に関しては、本論文では詳しく触れられていないので、今後の大きな研究課題になると思われる。質問者からは、親の期待度も関係しているのではないか（中国語は話せればよく、英語には高い読み書き能力を求める）というコメントが出された。

試験の内容及びその結果

- (4) 本研究では、Landry and Allard (1991, 1992) の「巨視的バイリンガル育成モデル」の枠組みが使われているが、モデルを検証することは難しく、本論文においても検証しきれていない点もあるし、モデルに対する批判もあるという指摘がなされた。
- (5) 最後に、今後の課題に関連して、次に同じような調査をするとしたら、どのような点を変更したいかという質問に対し、申請者は、授業の内容をもっと考察したいと答えた。それに対し、質問者は教育の内容面を見る意義を補足したうえで、さらに、カナダの教育制度を考慮し、幼児から中高までの長期にわたる教育を視野に入れる必要性を指摘した。また、パーシャル・イマージョンではなく、トータル・イマージョンで継承語教育を行ったらどうなるか等、比較の観点、批判的な視点を持つことの重要性についてもアドバイスがなされた。

上記の口述試験において、申請者は、真摯に丁寧に、かつ迅速に答えるとともに、自身の意見も的確に述べた。

2. 試験の結果

以上より、口述試験における内容は、論文の内容とともに高く評価されるものだと言える。申請者の研究能力、学識が十二分に確認され、審査委員会は、全員一致で博士の学位を授与するのに相応しいと判定した。